

## 魏志倭人伝(4)

山下 浩

本稿は、「魏志倭人伝(3)」からの続きである。

### 【大型墳丘墓】

九州勢が東進を行った時期を含む弥生時代中期に、中国地方東部や北陸に出現するのが、大型墳丘墓である。山陰の出雲(にしだに 西谷三号 出雲市 方形+四つの突起を持ち、方形部の長辺約40m、この形式を「四隅突出型」という)、因幡(にしかつらみ 鳥取市 形状は同様で、方形部の長辺約40m)、北陸(こし 小羽山三十号 福井市 形状は同様で、方形部の長辺約26m)、瀬戸内中部の吉備(たてつき 楯築遺跡 倉敷市 円形で二つの突起をもつ、円形部の長径50m前後)の広域にみられる。これらの大型墳丘墓は、それぞればらばらに出現したのではなく、例えば、西谷三号と楯築遺跡は供献用の特殊器台がともに見られ、西谷三号、小羽山三十号、楯築遺跡は副葬品の組み合わせが、鉄剣と、碧玉製管玉、ガラス製勾玉などの玉類を添えるなど内容が共通している。これらのことから、北陸から岡山県に及ぶ大型墳丘墓の出現は、一つの共通した文化に基づくものだと考えられ、出雲、因幡、越、吉備の安定した外交関係が窺われる。(参考資料: 卑弥呼「共立」前に起こった「倭国(大)乱」とはなにか 邪馬台国 松木武彦 洋泉社)

このような大規模なものだけでなく、小さいものも含めた四隅突出型墳丘墓の最も古いものは、広島県の備後(むねすけいけ 三次市の宗祐池西一号墳丘墓、庄原市の田尻山一号墳丘墓など)や安芸の千代田、岡山県の美作(竹田八号)などに見られ、いずれも吉備国の政治、文化の影響下にある地域であり、こうした地域で発生したのちに山陰や吉備に広がっていったと考えられている。(参考資料: 前方後円墳と弥生墳丘墓 近藤義郎 青木書店)

これらの地域ではそれまで、集落を単位とした銅矛、銅剣など武器型青銅器を祀る祭祀が盛んであったが、亡くなった集落やクニの指導者個人を祀ることを、集落の支配層が強制するようになって廃れていき、地域の支配者の権威を誇示する、いわば個人を神格化する巨大な墳墓が取って代わった。さらに、それと軌を一にして役目を終えた、集落単位の武器型宗教祭器である銅剣、銅矛などが各地で地中に埋納されていった。例えば、出雲の荒神谷遺跡では銅剣358本、銅鐸6個、銅矛16本が、雲南市の加茂岩倉遺跡では39口の銅鐸が埋納されている。青銅器の土中への埋納はこれらの地域にとどまらず、各地で行われたが、この新旧宗教の交代が要因となったのであろう。これまで武器型青銅器がなぜ埋納されたのかわかっていなかったが、大型墳丘墓との関連により、今後はより詳しく解明されていくだろう。(参考資料: 大系日本の歴史一 日本人の誕生 佐原真)

「銅鐸や青銅製武器形祭器の発見はほとんど偶然の機会、遺跡とわからなかった場所からの出土である。青銅製祭器の出土地をあとで考古学者が立ち会って観察すると、祭器を納めた土坑のほかには生活した痕跡も埋葬した形跡もみあたらない。このような性格の遺跡を埋納址と呼ぶ。」(出典: 古代を考える 稲・金属・戦争 佐原真編 吉川弘文館)

武器型青銅器の埋納には信仰に基づく、いわば聖域とみられる場所が選ばれている。九州の例を見ると、福岡県浮羽町の日永遺跡の銅矛、銅戈の埋納址は、英彦山(ひこさん)と岳滅鬼山(がくめきさん)を結ぶ線と背振、天拝山(せふり)を結ぶ線の交差点、桜馬場遺跡(うきだけ)は浮嶽と唐津城台地を結ぶ線と高島、鳥島を結ぶ線の交差点、その他、佐賀県の検見谷遺跡、玉江遺跡なども同様の場所に埋納されている。(参考資料: 市民の古代九州ニュース No.12 市民の古代研究会・九州)

「古代を考える 稲・金属・戦争 佐原真編」では続いてこうした祭器が埋納された宗教的根拠を古代からの信仰が残る伊勢神宮と石上神社に見る。伊勢神宮では、式年祭の神宝が神域内に埋納されること、石上神社では、石上の禁足地に埋め置かれる。武器形祭器を神宝として埋納した庶民の神事は後世に引き継がれていない。伊勢神宮などを除き、鏡などの神社の御神体は埋納されることなく、本殿に安置されている。弥生時代から古墳時代への移行は庶民の信仰にも変革をもたらしたのだ。

祭器用青銅器の埋納は、出雲、因幡、吉備、越などの地域から始まったと思われる。しかし、そのうち銅鐸については、次の【銅鐸】で詳しく述べるが、早期に九州勢の侵攻を受けたクニグニでは、銅鐸を侵略者の破壊から免れるために人里離れた山中などに埋納した。そのため、出雲の荒神谷遺跡では銅剣、銅矛と銅鐸と一緒に発掘されたが、早期に侵略されたクニグニでは銅剣、銅矛などの発掘場所から銅鐸が

一緒に見つかることがない。銅鐸は侵略を受けたときに破壊されたか、密かに埋納されていた。

だが、ここに一つ例外がある。

広島市東区福田の標高 413m の木の宗山の中腹にある烏帽子岩の下あたりから、銅鐸、銅剣、銅戈がまとまって出土している。烏帽子岩の近くに、比較的扁平で人為的に工作した跡のある花崗岩があり、その下に木炭がつまっていて、そこから銅鐸が、そして 25cm ほど離れたところから銅剣、銅戈が出土したと言われている。このとき浅い丸底の土器も出土したそうだが、これは残されていない。木の宗山と同じように、弥生時代の青銅器は多くの場合、意識的に集落から離れた丘陵斜面や山陰に埋められた状態で発見されているがその場所を石で囲ったり、石をかぶせたりして目印にすることはほとんどなく、このように立石の下から発見されるのは珍しい例である。(参考資料：

[http://www.mogurin.or.jp/maibun/bunkazai/kinomune\\_dou.htm](http://www.mogurin.or.jp/maibun/bunkazai/kinomune_dou.htm)) 安芸国は弥生時代中期、九州勢の東進の早期に征服されたが、ここで発見された銅鐸が発見例の本州最西端とされており、おそらくその宗教性についてこの時点では九州勢に認識がなく、破壊の対象とされなかったのだろう。破壊されないまま他の宗教祭器の銅剣などとともに保持され、最終的に現在地に埋納されたと思われる。

弥生時代中期、山陰、吉備、北陸の越、広島県の北部は、四隅突出型墳丘墓の伝播からみられるように、社会的、経済的に広く活発な交流が行われていたことが窺われる。これらの地域間では社会が安定し、平和が保たれていたのだ。九州勢は東進の期間、和国乱が終わるまではこれらの国々には武力侵攻していない。

九州勢は、新旧宗教の交代した吉備国との国交を重ねる中で、その宗教の先進性について学び取ることになった。北部九州は銅矛を中心に様々な青銅器祭器の生産地であり、武器型祭器を祀る古い型の宗教が支配していたが、九州勢の指導者は吉備国の新しい宗教を領国支配の手段に取り込んでいった。「集落を守るのは武器型祭器(武神)ではなく、集落の発展と安定に努めた亡き支配者たちの御霊だ」と広めていったと思われる。武器型祭器はそれぞれの地域で「聖域」とみなされる場所に丁重に埋納させた。戦争中のため、大型の墳丘墓を自分たちのために築造することはできなかつただろうが、のちに述べる、卑弥呼のための箸墓古墳築造にこの大型墳丘墓の構想が取り入れられ、吉備で作られた特殊器台も添えられるなど、この新しい宗教は古墳時代の精神世界へと繋がっていく。

さらに、集落の指導者たちの霊を祀るという信仰は、一般庶民の宗教文化にも深く根を張ることになった。これまた私の仮説であるが、集落の指導者たちの個人の霊を祀るという文化は、のちの「氏神さま」へと発展し、各地に氏神を祀る神社が集落や村々に数多く作られることになったのだろうと思う。日本各地の町や村にたくさんある神社の中には、「氏神さま」を祀っているものが多いが、ずっと昔の名もなき、村々を拓いたご先祖さまたちを祀ったのだろうな、と思っていたが、祀られている神々は「○○命」などと名付けられてはいるもののどんな人なのか地元の人にもほとんど知られていない。弥生時代中期から古墳時代前期にかけてこのような経緯で生まれた信仰と考えれば、祀られた神が地元の人々にあまり知られていないことが納得できるというものだ。しかし、例えば江戸時代に開墾された村落や浅瀬を干拓した新開地などにも氏神を祀った神社がある、などと反論されるかもしれない。その原因はたとえば、すでにある神社から分祀したとか、その土地の地域を守る神である「鎮守」やその人が生まれた土地の神で、どこへ転居しても変わらない「産土神」と一族の祖神である氏神とを混同したということが考えられる。それ以外にも、私の仮説に反する事例が多々あるだろうが、今後の研究課題の一つとしたい。

「集落単位の宗教祭器である銅剣、銅矛など」について

武器型祭器である銅矛、銅剣について少し説明しておく。

銅矛は、朝鮮半島から入ったと思われ、弥生時代中期頃から広形銅矛の段階に至るまで、主に北部九州を中心に西日本で出土している。その鋳型は北部九州の限られた地域でしか発見されていないので、九州のみで生産されていたと思われている。種類は、細形銅矛、中細形銅矛、中広形銅矛、広形銅矛があり、年代的に細形から中細形→中広形→広形の順で変化していった。中型の段階から、使おうと思えば武器として使用できたかもしれないが、おそらく使われることなく、武器型宗教祭器へと変質していった。そして墳丘墓の普及につれて宗教祭器の役割を終えて埋納されていった。

銅剣は、弥生時代の初期に大陸より伝来したといわれている。伝来時の銅剣は、細身で鋭いデザインで武器であったと考えられているが、巨大化した後期のものは実用的でなく、銅矛と同様に祭器へと変質していった。

その後、和国でも銅剣の鑄造技術を発達させ、弥生時代を通じて盛んに製造されたが、すぐに鉄剣も伝来した。大陸や朝鮮と違って、到来の時期的な差が少ないため、銅剣が戦場で使用されていた時期は比較的短いとされる。鉄剣が主流になってからは、銅剣は次第に主に宗教儀式に使用されていったと考えられている。

銅剣は九州地方、中国・四国地方などに特に濃密に分布する。儀式などで使用されるにつれ大型化したものと考えられ、形も徐々に変化した。現在では、作成時期により三種類に分けて、初期は「細形」、中期が「中細形」、後期が「平形」と編年分類されている。(参考資料：ウィキペディア「銅剣」)

細形銅剣は主に北部九州を中心に、弥生時代前期末から中期にかけて、甕棺墓や石棺墓から副葬品として出土し、九州よりも東の地域では少数ながら埋納された状態で発掘されている。

中細形銅剣は、細形銅剣から系統的に発展し、中四国地方から大阪府の摂津、淡路にまで広まった。平形銅剣は、四国の瀬戸内海沿岸部に広くみられる。

このように、初期のものはおもに北部九州で見られるものの、北部九州では銅矛が主流になり、徐々に減少していった。中細形銅剣の時期になると、中四国地方から近畿地方まで広がり、四国の瀬戸内海沿岸部では平形銅剣が広まった。

銅剣の制作地は、北部九州では細形から中広形までが盛んに作られ、中細形になると北部九州が急速に減少し、中四国から近畿地方西部まで拡大し、平形の段階ではそれぞれの地域で製作されるようになった。

このように、北部九州では銅矛が宗教祭器とされ、九州より東の西日本一帯では銅剣が宗教祭器として広まり、そこに近畿を中心に広まった銅鐸もオーバーラップして祀られていた。

武器型青銅器祭器は、武神に集落を守ってもらうというものであった。

弥生時代中期以降、銅剣、銅矛の大型化が進行したが、北部九州以外は鉄剣などの鉄製品が普及したとは言えない状況だった。近畿の大和地方で鉄器が作られるようになるのは弥生時代後期からである。銅剣、銅矛を武器として使わず、鉄剣が普及していないということは、九州勢が東征を始める以前は、何十年にもわたって和国が平和で、集落の治安維持のための必要最小限度の武器を除き、軍備を必要としない、戦争がない社会だったことを示している。そしてなぜか、九州勢との戦争が始まった後も、銅矛、銅剣が武器として再び製造されることがなかった。

話を九州勢の東進に戻そう。

兵庫までを支配下に置いた九州勢は、強力な近畿勢と対峙することになった。

これ以後の推移については『古事記』、『日本書紀』に苦戦の様相が詳しく書かれており、大阪での敗戦→和歌山へ迂回→和歌山から奈良へ→<sup>いわればこ</sup>磐余彦(=神武天皇)の勝利、の筋書きになっている。この時期を『魏志倭人伝』は「倭国乱」、後漢書に<sup>れきねんぬしなし</sup>「歴年無主」と戦乱が数十年にわたったことが記されている。この戦乱は遺跡を個別に見ていってもその概要を読み解くことが難しいが、『古事記』、『日本書紀』のあらずじに従って遺跡の状況を見ていきたい。

## 大阪府の遺跡の状況

### <sup>あま</sup>安満遺跡

大阪府高槻市の安満遺跡は、淀川の中流に面した平地に環濠を掘り込み、数百年の間、地域の中心的な集落として栄えてきた。弥生時代前期から後期まで続いた、全体では東西 1500m、南北 600mに及ぶ大規模な遺跡である。それが、弥生時代後期、環濠が埋もれてしまい、少数の堅穴住居が残るだけになった。すなわち、集落は戦に敗れ、環濠は埋め戻され、わずかな人々がその地に残ったのだ。その同時期、安満を背後から見下ろす北側の尾根上にたくさんの住居を大きな環濠が取り囲む<sup>こそべ</sup>古曾部・<sup>しばたに</sup>芝谷遺跡が現れる。(参考資料：列島創世記一 日本の歴史 旧石器・弥生・古墳時代 松永武彦)

### 古曾部・芝谷遺跡

古曾部・芝谷遺跡は、標高 80~100mの丘陵上に営まれた最大級の高地性環濠集落跡で、100 棟以上の住居や木棺墓がみついている。集落の周囲には環濠が掘られており、その範囲は東西 600m、南北 500 mに及んでいる。

(参考資料：[http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi\\_kanko/rekishi/rekishikan/jidai/kyusekki/1327658107375.html](http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi_kanko/rekishi/rekishikan/jidai/kyusekki/1327658107375.html))

### 池上曾根遺跡

和泉市と泉大津市にまたがる弥生時代前期から中期までの中心的な集落だった池上曾根遺跡も安満遺跡と同様に、環濠が埋もれて小さな集落になり、近くの山の上に観音寺山遺跡という大きな高地性環濠集落が現れた。(参考資料：列島創世記―日本の歴史 旧石器・弥生・古墳時代 松永武彦)

池上曾根遺跡は、和泉市池上町と泉大津市曾根町とにまたがる弥生時代中期の環濠集落遺跡で、南北1500m、東西600mの範囲に広がり、総面積60万平方メートルに達する大集落遺跡である。集落の中心部で見つかった弥生時代中期の大型建物と井戸は、弥生時代のイメージを塗りかえるものであった。

大型建物は東西19.2m、南北6.9m、面積133㎡と、弥生時代最大級の規模をもつ掘立柱建物で26本の柱で構成されていた。そのうち、直径60cmもある当時の柱の根元が腐らずに、17本も残されていた。

建物の南側にある井戸は、直径2.3mのクスノキの大木を刳りぬいて井筒にしており、刳りぬき井戸としてはわが国最大のものである。発掘されたときも水が湧き出て、井戸が生き続けていた。(参考資料：<http://www.city.osaka-izumi.lg.jp/bizikankosan/rekishi/1317802843164.html>)

この遺跡は、時代的には弥生時代中期までのもので、九州勢によって衰退したとは言いにくく、それ以前の近畿統一戦争の痕跡とも思われる。

### 観音寺山遺跡

池上曾根遺跡と入れ替わるように作られた観音寺山遺跡は、和泉市弥生町にある弥生時代後期の集落遺跡である。遺跡は、和泉山地から槇尾川沿いにのびる丘陵の尾根上にあり、標高60～65m、周囲の平地との比高差は約25mという高台に作られた高地性環濠集落跡で、竪穴住居が120軒近く検出されている。住居群の周囲には環濠が確認されている。また、武器類とも考えられる石器(石鏃・尖頭器・投弾など)が多く発掘されていることは、緊張状態が続いたことを表している。(参考資料：<http://hmuseum.doshisha.ac.jp/html/articles/record/detail.asp?xml=record20041123.xml>)

海拔22mの枚方市交北町こうほくに旧石器から中世にわたる交北城じょうのやまノ山遺跡がある。弥生時代中期終わりごろに、ここの人々はその東方1キロあまりにある海拔60m前後の丘陵上の田ノ口山遺跡に移り住んだらしい。この遺跡は、南北400m、東西600mの大集落である。低位台地の集落が、ムラごとそっくり付近の丘陵に移動していることは、弥生時代における高地性集落成立の背景を考えるうえで重要である。

弥生時代終末期から古墳時代前期になると、交北城ノ山遺跡などの集落がふたたび形成されるようになる。この現象は弥生時代中期中頃に、丘陵上に移り住んだ人々が低地に戻ってきたように思われる。(参考資料：日本の古代遺跡 11 大阪中部 瀬川芳則 中尾芳治著 保育社)

こうした平地から高所への集落の移転は、住民の社会生活上の合理的な行動とは言えない。大阪湾岸の高地性集落は、敗戦という特殊要因により発生したのだろう。平地にあった環濠集落が破壊され、征服者の圧迫から逃れるため集落の高所への移転が行われている。征服された人々は、征服者から税や労役などを課されるのみならず、有無を言わさない徴兵、不合理な収奪・抑圧も受けていたのだろう。

大阪府でも多くの高地性集落がみられる。

東部の奈良県に近い柏原市の高尾山の山頂付近から、弥生時代後期の土器の破片、石鏃や石槍などが大量にみつまっている(既述)。そのほか、生駒山地には、竜間、野崎、寺川、国見、山畑、岩滝山、平野山などの高地性集落が見られる。

枚方市伊加賀の海拔50～67mの丘陵上に鷹塚山遺跡、香里丘陵の海拔約25mに山之上天堂遺跡が、交野市寺かたのの海拔200mの山上に南山遺跡がある。

寝屋川市東部の海拔50～60mの丘陵上に、弥生時代中期初めの太秦遺跡うずまさがある。ここでは、多くの大型打製石鏃、打製石槍やその破片がみつまっている。太秦遺跡は、展望のよく利く丘陵頂上部にいとなまれ、防御の機能を十分に備えている。そして同じころ淀川対岸の摂津においても高槻市の天神山遺跡が丘陵上に現れ、近畿地方の他の地方地域にも高地性集落が現れ始める。なおこの太秦遺跡は、弥生時代後期になると消滅もしくは急激に縮小してしまっているようである。

(参考資料：日本の古代遺跡 11 大阪中部 瀬川芳則 中尾芳治著 保育社)

大阪府では、豊中市勝部遺跡、四条畷市雁屋遺跡かりや、八尾市山賀遺跡などで「戦士の墓」が発見されてい

る。雁屋遺跡と山賀遺跡では、石鏃数本が木棺の中から出土している。勝部遺跡では、打製石剣が「あたかも背後から突き刺された状態で遺存していた」という。(参考資料：図説大阪府の歴史 津田秀夫 高橋啓 河出書房新社)

## 和歌山県の遺跡の状況

『古事記』、『日本書紀』では、磐余彦(=<sup>いわれびこ</sup>神武天皇)が浪速国に入ると、この地を支配する長髓彦<sup>ながすねひこ</sup>の抵抗にあつて、やむなく兵を返し、南に向かつて紀伊国から中州<sup>なかつくに</sup>に入ろうとした、とある。このことから、九州勢の東進は近畿の勢力に行く手を阻まれ、紀伊半島の南下を余儀なくされたのだろう。

### 太田黒田遺跡

太田黒田遺跡は紀ノ川の南岸の和歌山駅の東側に広がる遺跡で、標高 3~4mの沖積地に弥生時代から江戸時代までの集落が営まれている。特に弥生時代には前期に水田遺構や竪穴住居を伴う集落が形成され、中期後半には集落域が拡大し、和歌山平野のなかで拠点的な集落として機能していた。この遺跡は多くの遺構、遺物が発掘されているが、弥生後期の遺構、遺物がなぜか欠落している。この後の奈良時代の遺構や遺物には官衙的な色彩の強いものがあるなど、紀ノ川河口部でも極めて重要な土地であったことが推定される状況の中で、その時期のみが抜け落ちているということは、九州勢の侵攻がこの時期あったこと、そして九州勢に敗れたことを疑わせる。(参考資料：日本の古代遺跡 46 和歌山 大野嶺夫 藤井保夫著 保育社)

### 紀ノ川河口部の防衛線

<sup>たちぼなだに</sup>橋谷遺跡、天王塚弥生遺跡、滝ヶ峯遺跡の各遺跡は、中期末から後期前半代の土器が出土しており、同時期に営まれて、社会的な機能を果たしていたことは確実である。これら三遺跡は、いずれも東経 135度 16 分の和歌山平野の東端に近い丘陵上に営まれたもので、南北一直線上に位置している。倭国の大乱の結果、その軍事的緊張から出現した高地性集落としてこれら三遺跡をとらえるならば、紀ノ川河口部の軍事的緊急時に、その防衛手段として山上で烽火をあげるなどの通信機能をもった遺跡と推定される。これらの遺跡の状況を見てみよう。

橋谷遺跡は標高約 100m、比高差約 80m、山を下れば標高 10m前後の北田井、西田井、田屋などの遺跡が広がっている。

天王塚弥生遺跡は標高 150m付近に営まれた高地性集落であるが、発掘調査されていないため詳細は不明である。

滝ヶ峯遺跡は、標高 77~85mの丘陵鞍部の平坦地を中心に遺構が検出された。平坦地の北西部の斜面にさしかかる地点には、居住域を保護する大規模な濠が斜面に平行して掘削されており、高所側には土塁状の高まりが溝に平行している。岩盤を掘削した溝は、深さ 2.1m、U字状の溝底の幅は約 1.6mであった。また、平坦地の西方では多量の土器を含む溝が、斜面に直交して掘削されていた。(参考資料：日本の古代遺跡 46 和歌山 大野嶺夫 藤井保夫著 保育社)

このように、和歌山県も弥生時代後期に戦場となり、集落の廃絶、高地性集落の発生が見られる。九州勢は紀伊水道を南下して紀伊国を攻め、地域を平定したうえで北上し、近畿中央部、奈良県へ攻め込んだのであろう。

## 奈良県の遺跡の状況

### 唐古・鍵遺跡

弥生時代中期、奈良盆地中央部にあった大規模な環濠集落に、唐古・鍵遺跡がある。遺跡面積は約 30万㎡。規模の大きさのみならず、大型建物の跡地や青銅器鑄造炉など工房の跡地が発見され、話題となった。全国から糸魚川産ヒスイや土器などが集まる一方、銅鐸の主要な製造地でもあったと見られ、弥生時代の日本列島内でも重要な勢力の拠点があった集落ではないかと見られている。私見であるが、この地が近畿勢の都であり、かつ銅鐸文化圏の中心地だったのだろう、河内、近江、紀伊など近畿のみならず、中部地方、中国地方東部など各地の搬入土器が出土している。九州勢の侵攻の最も重要なターゲットは、和国の中で北部九州に並ぶ政治、経済、文化の中心地であった唐古・鍵遺跡だったのだろう。ここを抑え

れば、和国内での強力な敵対勢力を滅ぼすことになり、和国の統一を見通すことができるのだ。

唐古・鍵遺跡は弥生時代前期に出現し、中期に最盛期を迎えたが、後期になると遺跡からの出土物が減少していき、人口も減少したと考えられる、長期にわたって栄えた集落である。古墳時代後期まで小規模な集落として遺跡は継続していくが、六世紀になると遺跡内に小型前方後円墳が築かれ、しだいに廃れていった。(参考資料：ウィキペディア「唐古・鍵遺跡」、唐古・鍵遺跡が語る邪馬台国 邪馬台国 西川寿勝 洋泉社)

弥生時代後期から古墳時代前期へと社会が発展すれば、宮崎県都城市の遺跡で見たように、そこにある集落も弥生時代の環濠集落から古墳時代の遺構へと何層にも重なった遺跡群として発掘されるはずのものであるが、集落が衰退し、廃れていくというのは、社会の発展に組み込まれず、取り残されていったことを示している。これもまた後で詳しく書くが、古墳時代前期に奈良県桜井市に巨大な都市遺跡の纏向遺跡が築かれるのだけれども、その真逆の経緯をたどっているのだ。つまり、弥生時代前期からの集落は廃れていき、新興の集落が取って代わるといって社会の大変動が奈良盆地を中心に繰り広げられた。

昭和 57 (1982) 年唐古池の東 500m の初瀬川の左岸で法貴寺遺跡の発掘調査が行われ、方形周溝墓一基と溝やピットが多数検出された。それらは古墳時代前期始めのころを中心とし、時期的に唐古・鍵遺跡に続くものであった。その規模からいって唐古の人々がそのまま法貴寺へ移ったとは考えられないが、少なくとも一部が移動した可能性は十分ある。

弥生時代後期末での集落の衰退は、なにも唐古・鍵遺跡に限ったことではない。大和において知られている坪井・大福遺跡など 14 の拠点集落の多くは、やはりこの段階で消滅なり衰退しているのである。こうした拠点集落の衰退とやらはらに、東部の山麓や三輪山麓の集落が充実していき、纏向遺跡や大型前方後円墳が出現するのである。(参考資料：日本の古代遺跡 5 奈良中部 寺沢薫 千賀久著 保育社)

奈良県は多くの古墳や平城京、神社仏閣など遺跡の宝庫であるが、弥生時代以前の遺跡については古墳や古代の遺跡の下に埋もれるなどして、発掘調査もされないままにきている。

葛城市にある竹内古墳群とまったく同じ範囲で弥生式土器の破片が採集され、キトラ山遺跡と名付けられているが、発掘調査されていないためその内容はわからない。キトラ山遺跡は平地より 50m 高い丘陵上にあり、竹内街道を見下ろす位置にあり、大和盆地へ出入りする要をおさえるという意味で重要な高地性集落だった。同様に、葛城山の中腹、標高 200m 前後の高原状になっているところから、弥生時代後期の土器や石器が出土している。ここも高地性集落である可能性が高い。

忌部山遺跡は、橿原市の西方、曾我川右岸に独立した小山である忌部山 (標高 108.5m) にある高地性集落で、曾我川およびそれに沿った交通路をおさえるのに格好の地であった。

南部の吉野川上流部にある引の山遺跡は、五条北東部の丘陵上に後期後半にあらわれた高地性集落で、大和南部とをつなぐ烽火的功能をもっていたと考えられている。

このように、奈良県南部には多くの高地性集落が見られ、和歌山県方面から北上してくる外敵に対峙していたと思われる。これに対し、奈良県北部には目立った弥生時代の遺跡は少なく、斑鳩地方の三室山の標高 70m 前後のところから土器や石器が出土していて、高地性集落ではないかとみられているくらいである。(参考資料：日本の古代遺跡 6 奈良南部 伊藤勇輔 楠元哲夫著 保育社)

奈良県の遺跡の状況から見えることは、弥生時代と古墳時代の断絶である。弥生時代の遺跡は古墳時代に継承されず、中心的集落であった唐古・鍵遺跡は廃れ、まったく新しい都、纏向遺跡が築かれた。政治的に異なる勢力によって旧来の集落が衰えていき、新参の勢力によって新しい国づくりが行われたのだ。今、奈良県を歩いて見える多くの古墳や古くからの神社仏閣は古墳時代以降のもので、古墳時代の遺跡に弥生時代から継承されたものはほとんどない。大和は被征服地だった。

『古事記』、『日本書紀』に書かれた経路に沿って近畿の遺跡の状況を見てみたが、九州勢が浪速国で敗れたことを示す遺跡は見られないし、数十年間にわたる「倭国乱」が行われたことを直接的に示す戦争遺跡なども見当たらない。また、本当に『古事記』、『日本書紀』に書かれた経路で戦争が行われたのかも確認できない。しかし、この時期に記紀に書かれた各地で戦乱があったことは見て取れるし、西日本や近畿の社会の大変動が「倭国乱」があったことを間接的にではあるが、はっきりと示しているといえよう。また、瀬戸内沿岸部の高地性集落が、弥生時代中期に発生した後、後期になって再び築かれていることは、近畿中央部の戦乱と、一進一退の戦況による九州勢の混乱などに対応するため、周防、安芸、播磨など占領地での物資収奪、集落の働き手である若者の強引な徴兵などが厳しさを増したのではないかと推察される。しかし、占領地ではない吉備、伊予、発祥地である九州では後期の高地性集落が見られないが、それ

はこれらの国々の九州勢に対する力関係の強さを想起させる。そして何より、奈良盆地中央部にあった、西日本の経済、文化の中心地として栄えた唐古・鍵遺跡をはじめとする多くの旧来の遺跡の衰退は、それ以後の九州勢の文化が西日本に広範に強く浸透していく画期となったことを示している。

ちなみに、奈良県の北に位置する京都府においても、この時期の戦乱の跡を残す遺跡が見られる。

山科盆地の一隅を占める中臣遺跡は、縄文時代から断続的に中・近世まで続く遺跡だが、その中心は弥生後期から古墳時代初頭の時期である。約60万㎡の広がりをもつこの遺跡で、これまでに発見した竪穴住居跡の数は120を超えるが、その中で最も多いのは弥生後期から古墳時代の初頭に属するものであった。しかも、この時期の竪穴住居跡のうち八割以上が焼失した痕跡を残していた。東隣する琵琶湖周辺でも、かつて同じような焼失村落の遺跡が発掘されている。(参考資料: 図説 京都府の歴史 森谷尠久 河出書房新社) 九州勢が大和を征服した後、京都、琵琶湖周辺へと侵出していったのだろう。なお、九州勢の実際の進路が『古事記』、『日本書紀』記載のとおりであったかはわからない。大阪から京都に入り、大和を攻めたのかもしれないが、竪穴住居の焼失が古墳時代初頭に属するものがあるということは、おそらく記紀の道筋のとおり、九州勢の東進が行われたことに間違いなからう。

こうした社会の変化と軌を一にして、宗教・文化の面で姿を消すものの一例が、近畿勢とともに姿を消した銅鐸である。

### 【銅鐸】

銅鐸は、大きなベルのような形状の青銅器で、祭器の一種であったと考えられている。出土する地域は、近畿地方を中心に広く分布しているが、ほとんどの場合、居住地から離れた地点に意識的に埋められた状態で発見される。土器や石器と違い、住居跡からの出土はほとんどなく、また銅剣や銅矛など他の銅製品と異なり、墓からの副葬品としての出土例は一度もないため、個人の持ち物ではなく、村落共同体全体の所有物であったとされている。また、銅鐸は、銅剣や銅矛に匹敵する弥生時代の代表的な製作物であるが、『古事記』『日本書紀』などの古文獻には、全く記載されていない謎の青銅器である。(参考資料: ウィキペディア「銅鐸」)

なぜ記載されていないのだろうか。まず始めに指摘しておきたいのは、文字のない時代だったこと。銅鐸を隠匿したことは記録されず、人々の記憶の中で子孫へ伝承されないまま消えていった。そして、もう一つは銅鐸が近畿を中心とした勢力の祭器であったことである。

九州勢の祭器は銅鏡であった。「弥生時代の中期、北部九州では、甕棺墓に前漢鏡が副葬されるようになった。銅鏡は宝器として珍重され、後期になって副葬され始めるようになった後漢鏡は、不老長寿への祈りを込めた文が鋳出され、その鏡を持った人は長寿や子孫の繁栄が約されるというものだった。」(参考資料: ウィキペディア「銅鏡」)

九州勢は、近畿勢の集落を占領すると、自分たちの宗教観と一致しない祭器である銅鐸を破壊していった。例えば、兵庫県豊岡市の久田谷銅鐸は、5~10cm前後に砕かれた状態で発見された。銅鐸の原料の青銅は貴重な金属であり、鏡などの材料でもある。破壊された銅鐸は鏡などに再生されたのではないか。奈良県桜井市の脇本遺跡からは、銅鐸の破片の他に銅鐸とは違う鋳型などがまとまって出土し、「銅鐸片を溶かし、鏡や鍬などの青銅器に作り替えた」可能性が寺沢薫氏により指摘されている。近畿勢の村々、国々は、九州勢に敗れ、敗退あるいは降伏するときに九州勢に銅鐸を破壊されないよう、発見が困難な、村を外れた丘陵の麓、あるいは頂上の少し下あたりの土中に埋めた。(参考資料: ウィキペディア「銅鐸」) 大型墳丘墓が作られた出雲、因幡、越、吉備では銅鐸だけでなく銅剣、銅矛など青銅製祭器もともに土中に埋納されたが、それ以外の地域では、銅剣、銅矛などを埋納するよりも早い時期に銅鐸を侵略者から守るために埋納されていった。九州勢は占領後、自分たちの宗教にない、銅鐸を宗教祭器とする祭祀を禁止したため、近畿勢の宗教儀式、祭礼などは行われなくなり、隠匿された銅鐸はついに掘り出されることなく人々から忘れ去られていった。

もし、この数十年にわたる戦乱で近畿勢が勝利していたら、大型墳丘墓の発展形の古墳が誕生せず、新旧宗教の交代がなく、銅鐸が銅鐸文化圏から完全に葬られてしまうこともなく、その後も宗教祭器として使われ続けたことだろう。近畿勢は敗れ去り、銅鐸文化も消え去った。

みょうどう  
名 東遺跡の銅鐸

昭和 62 (1987) 年、徳島市名東町二丁目の名東遺跡の緊急調査により、弥生集落に隣接する方形周溝墓群の一角にある、不整長方形プラン(長辺約 60cm、短辺約 35cm、深さ約 30cm)を呈する埋納壙中から、扁平鈕式六区袈裟襷文銅鐸が出土している。

名東銅鐸の埋納土壌の埋納土は、大きく五層に分けられる。この土層から、銅鐸埋納は、①土壌の掘削、②土壌底部に厚さ 5cm の灰黄色極細砂(シルト)を敷く、③2~4 層の土で埋納土壌中央部に長辺 42cm、短辺 12cm、深さ 17cm の同地区埋納のための二次的土壌を作る、④銅鐸の緒を上下にした状態で、鈕下がりの状態で埋納され、底部に敷いた土に類似した土で埋納して、完了する、⑤埋納壙内に土器片、炭片が含まれる。

という銅鐸埋納行為が復元される。

また平成 4 (1992) 年に行われた、名東遺跡の西方に位置する国府町矢野遺跡の一般国道德島南環状線建設工事に伴う緊急調査により、最新式の突線鈕五式六区袈裟襷文銅鐸が発見された。集落内で銅鐸埋納坑が検出されたのは全国的にも類例が少ない。

この銅鐸は、<sup>くりぬき</sup>剝抜式の木製合口容器に納められていたと考えられ、土坑の周りには、7 本の柱穴が確認されたことにより、埋納壙に関連すると考えられる独立棟持柱を持つ切妻屋根の建物の存在が報告されている。銅鐸埋納坑に柱穴や建物跡が伴う例は、この矢野遺跡と島根県の荒神谷遺跡のみで他に例がない。

名東遺跡と矢野遺跡は鮎喰川を挟んで対峙しており、銅鐸の埋納方法に類似点が認められるが、埋納時期の差(前者は弥生時代中期末から後期初頭、後者は後期中葉から後葉—邪馬臺国の時代)や銅鐸の形式差も存在する。(参考資料: 図説徳島県の歴史 三好昭一郎 高橋啓 河出書房新社)

これらの銅鐸は九州勢の侵略、破壊から守るために埋納されたのではなく、銅剣、銅矛などが地中に埋納されたのと同様の宗教的動機によって行われている。埋納は九州勢が侵攻する以前に行われており、このことは逆に、徳島市への九州勢の侵攻が弥生時代後期後葉まで行われなかったことを示している。それまでに吉備などで発祥した新しい宗教観が伝播してきたのだろう。

銅鐸文化圏から外れた九州でも、銅鐸や銅鐸の鋳型が発掘されている。しかし、それはよその地域とは異なり、発見が困難な場所からでなく、遺跡から発見されており、隠匿されたわけではない。禁止されたから隠したということではないのだ。

鳥栖<sup>やすながた</sup>市の安永田遺跡で銅鐸の鋳型が発見されている。

安永田遺跡は、弥生時代中期の後半から末にかけての遺跡で、銅鐸鋳型 5 点、銅矛鋳型 5 点の計 10 点の鋳型片が、一括して国の重要文化財に指定されている。谷底にもっとも近いところから青銅器の原料を溶かしたと思われる炉の跡が見つまっているが、銅鐸本体は出土していない。この遺跡は、弥生時代中期の後半から末にかけてのものであり、北部九州が征服された時期である。それまでは、北部九州は周辺各国と交易を行っており、山陰などの銅鐸文化圏への輸出用に銅矛などと一緒に銅鐸を製造していたが、南九州勢の北部九州征服とともに対外関係は急速に悪化し、輸出がストップした。そのため、銅鐸は製造されなくなり、鋳型だけが残されて、銅鐸そのものは遺跡から発掘されていない。この地方で銅鐸を宗教祭器として利用していたわけではないのだ。

このほか、吉野ヶ里遺跡では銅鐸一個と銅鐸の鋳型が発見されている。「埋められた時期は弥生時代終末(三世紀)が上限と推定される。発見された銅鐸は島根県で出土したといわれている『木幡家所有銅鐸』と同じ鋳型で作られた兄弟銅鐸であることが判明した」。(出典: IPA「教育用画像素材集サイト」<http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/>) (「邪馬台国大研究ホームページ / 学ぶ邪馬台国 / 銅鐸の謎」より) 時期的には卑弥呼の時代、またはその後の時代である。当時、山陰ではそれまで大きな勢力を保ち、大和国と共存関係にあった出雲、伯耆などの国が新たな侵略のターゲットにされ、激しい侵略戦争が続いていた。余談であるが、この時期、古墳時代前期初頭に吉野ヶ里遺跡の三倍の面積を誇った鳥取県米子市、大山町にまたがる<sup>むきぼんだ</sup>妻木晩田遺跡の巨大集落が終末を迎え、鳥取市の青谷上寺地遺跡で激しい殺戮が行われ、集落が滅びている。近畿からだけでなく、九州からも軍隊が派遣されていたと思われ、当時北部九州では銅鐸は見られなくなっていたので、珍しい宝物として持ち帰られたのだろう。出土した場所が吉野ヶ里遺跡の大曲一の坪地区の発掘調査現場であり、村外の発見が困難な場所ではない。ということは、派遣された兵士が戦利品として持ち帰ったものと思われる。ちなみに、九州で発掘されたと確認された銅鐸はこの一個だ



けである。

九州勢と和議を結んだと思われる吉備国では発見が困難な山中などでなく岡山市の高塚遺跡と総社市の神明遺跡からそれぞれ破壊されず、埋納された状態で一つずつ銅鐸が発見されている。

(参考資料：高塚遺跡 <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/sagu11.html>

神明遺跡 <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/sinmeidoutaku-top.html>)

同じく伊予国では四国中央市の上分西遺跡から銅鐸の上部にあたる鈕だけが切り離されて埋納されていた。銅鐸の下部、本体部分は見つかっておらず、切断された理由は不明である。

(参考資料：<http://doutaku.cocolog-nifty.com/blog/2010/08/post-2e46.html>)

このことをもってこの両国で銅鐸の破壊等が行われなかったことの証明にはならないが、参考までに挙げておく。

それから約 500 年後の 713 年、大和の長岡野で、銅鐸が発見されたとき、人々は、これをあやしみ、『続日本紀』は、「その制（形）は、常と異なる」と記している。

この時代には、もう誰も銅鐸が過去にあったということさえも知らなかったのだ。

### 九州勢東征を裏付けるその他のものについて

先ほど、「九州勢の祭器は銅鏡であった」と書いたが、銅鏡の遺跡からの発掘状況は、銅鐸と正反対の状態を示している。

すなわち、奴国が北部九州を支配していた弥生時代中期は、銅鏡はほぼ北部九州と、山口県の一部などの遺跡からしか発掘されていなかったものが、弥生時代中期から後期にかけて、南九州勢に奴国が滅ぼされた後ほぼ一世紀余り、三角縁神獣鏡の副葬が始まるまで、北部九州のみならず、日本列島全体で中国鏡を多量に副葬する墓が存在しなくなる。その後、古墳時代前期になると、近畿地方を中心に、広く西日本一帯、東海、北陸などの古墳から銅鏡が発掘されるようになる。銅鏡は九州でも発掘されているが、近畿などとはその数量に大きな差があり、大陸から銅鏡が輸入されても、その窓口である北部九州を素通りして、近畿に運ばれ、近畿の王が九州を含む各地の有力者に下賜していた。

具体的にみると、奴国が支配していた弥生時代中期までの遺跡では、福岡県糸島市の三雲遺跡群一号甕棺から前漢鏡 35 面が、二号甕棺から前漢鏡 22 面以上が、飯塚市の立岩遺跡群からあわせて 10 面が、春日市の須玖岡本遺跡から前漢鏡 30 面以上が出土しているのに対し、近畿地方での発掘は知られていない。

古墳時代になると、近畿地方では天理市の黒塚古墳から三角縁神獣鏡 33 面が、天神山古墳から内行花文鏡 4、方格規矩四神鏡 6、画文帯神獣鏡 4、三角縁変形神獣鏡 2、獣形鏡 3、画像鏡 2、獣帯鏡 1、人物鳥獣鏡一が、京都府木津川市の椿井大塚山古墳から内行花文鏡 2、方格規矩四神鏡 1、画文帯神獣鏡 1、三角縁神獣鏡 32 面が出土するなど、各地の古墳から多くの銅鏡が出土している。これに対し、北部九州では、弥生時代後期、卑弥呼の時代に王のいた伊都国があった糸島市の平原遺跡から細かく切断された銅鏡片 40 面分が、古墳時代前期、福岡県苅田町の石塚山古墳から三角縁神獣鏡 14 面が出土しているが、近畿地方と比較すると出土地、数量とも劣っており、九州は近畿地方からみると「地方」になっていた。

(参考資料：日本列島における中国鏡の分配システムの変革と画期 上野祥史)

北部九州の甕棺墓から多くの後漢鏡が発掘されているが、甕棺墓についても発生期からみられなくなる時期までを見てみると、南九州勢による奴国の滅亡が背景に見て取れる。

甕棺墓は弥生時代前期から中期の北部九州に多く見られ、特に奴国が北部九州を広く支配していた弥生時代中期に最盛期を迎え、主として糸島市、福岡市近辺、佐賀県神埼郡付近などに広く分布していたが、奴国滅亡後の弥生時代中期から衰退し始め、末期にはほとんど見られなくなった。(参考資料：ウィキペディア「弥生時代の墓制」) 末期以降は、糸島地域でわずかに継続するが、これは『魏志倭人伝』に王がいたと書かれている伊都国がこのあたりにあったので、王やその一族が先祖と同様の方法で葬られていたのかもしれない。そのほかは、かつて甕棺墓のあった地域で散発的に発掘されるのみとなり、古墳時代までには消滅する。北部九州に侵入した南九州勢は、その地に都を設けることなく東進を開始したことから、

甕棺墓で葬られるべき人物が、代官や副代官、あるいは軍司令官にあたる官、鄙守のほかにはなくなったこと、その国の発祥の地、南九州、日向に甕棺墓の風習がなかったこと、奴国の支配層が滅ぼされ、地域社会の支配構成が大きく変化したことなどがその要因と考えられる。

鉄器について見てみると、弥生時代中期以前、鉄器が副葬された墳墓は、北部九州及びその周辺部だけに見られたものが、後期に入ると数は少ないが鉄剣などの副葬が玉類の制作地である但馬、丹後地方に見られるようになる。後期後半になると中国、北陸、東国へも広がっていった。和国乱によって、北部九州にはほぼ限られていた武器としての鉄剣が、九州勢の版図拡大に伴って各地へ広まったのである。

以上をまとめると、

- 弥生時代中期まで北部九州の甕棺墓に多量に副葬されていた後漢鏡の量が激減し、甕棺墓も見られなくなる。
  - 九州勢の東進によって、弥生時代中期に中西部瀬戸内と大阪湾岸に、弥生時代後期に近畿とその周辺部に戦争を原因とした高地性集落が出現する。
  - 銅鐸は九州勢の破壊から免れるために、集落から離れた丘陵の麓、あるいは頂上の少し下あたりの土中に埋められ、掘り返されることなく忘れられていった。
  - 当初は九州の王墓で副葬されていた銅剣、銅矛など青銅製武器が武器形祭器へと大型化し、さらに、個人を祀る祭祀が行われるようになって役割を終えて、地中に埋納された。
  - 古墳時代に入ると、鏡は大和国の祭器として下賜されるようになり、近畿を中心に多くみられるようになった。
  - 九州勢の領土の拡大に伴い、鉄剣が各地に広まった。
- このように、九州勢の東進によって、西日本の社会、文化が大きく変動していった。

「九州勢」の名で論を進めてきたが、そろそろ「九州勢」と「邪馬臺国」とを一つにしなければなるまい。弥生時代後期終末までが「九州勢」で、古墳時代に入ると「大和国」に急に呼称が変わる、ということは、両者の実態が同一だということだ。

まとめの中で「鏡は大和国の祭器として下賜されるようになり」と書いたが、九州で発祥し、近畿までを征服したのは大和国である。そして、「邪馬臺国」の読み方のところで結論付けたように、「邪馬臺国」＝「大和国」であり、九州勢とは「邪馬臺国」だったのだ。そして、107年に後漢に生口160人を送って皇帝に謁見を求めた王、帥升は大和国の最初の王だった。また、「倭面土國」は倭人が自分たちの国名を話した音「やまと」に後漢が漢字を充てたものだったと考えることができるが、確証はない。「倭の面土國」と読むのだとしたら「面土國」の「面」を「回」の誤りと考えて「えと国」や「いと国」とも読み、「いと国」の王と名乗った可能性がある。『魏志倭人伝』に伊都国に王がいる、と書かれているが、もしも、帥升らが北部九州征服後、奴国征服に協力した伊都国を仮の都として戦後統治を行っていたとしたら「いと国の王」と名乗ってもおかしくあるまい。一応、二通りの読みを挙げておく。

やまと国は九州で発祥し、近畿に王都を置いた。そして、王都の地名を「やまと」とし、それは後の「大和」になった、が一つの考え方、もう一つは、九州勢がそれまで「やまと」と呼ばれていた地を首都とし、『魏志倭人伝』では女王のいる場所が「邪馬臺国」と紹介された、である。前者の考え方では、「九州勢」は始めから「やまと国」であるが、後者では「大和国」になる前の国名は不明である。これは「倭面土國」の読み方にも関係しており、先ほどあげた二つの読み方「やまと国」と「いと国」にそれぞれ対応する。

すなわち、『魏志倭人伝』の邪馬臺国の記事は、大和国、つまり、後の大和朝廷、さらには、現在の皇室に続く日本建国の壮大な歴史のワンシーンを切り取ったものだったのである。

大和国は南九州で発祥し、九州統一後瀬戸内海を東征し、近畿に至った。

「其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歷年」の短い一文の解説に恐ろしく多くのページを割いてしまった。我々が行おうとしているのは『魏志倭人伝』の解説である。本旨に戻って続きを始めよう。

原文「乃共立一女子爲王名曰卑彌呼。事鬼道能惑衆。年已長大無夫婿有男弟佐治國。自爲王以來少有見者。以婢千人自侍。唯有男子一人給飲食傳辭出入居處。宮室樓觀城柵嚴設常有人持兵守衛」

訳「乃ち共に一女子を立てて王と為し、名付けて卑弥呼と曰う。鬼道を事とし能く衆を惑わす。年已に長大なるも夫はなく、男弟有りて国を治むを佐く。王と為りしより以来、見るこゝと有る者少なし。婢千人を以て自ら侍せしめ、唯男子一人有りて飲食を給し、辞を伝えて出入りす。居る処の宮室は楼観・城柵を厳かに設け、常に人有りて兵を持して守衛す。」

女王ひみこについての文章であるが、「共に一女子を立てて王と為し」とはどういう意味だろう。

近畿勢に勝利した九州勢の王が逝去した。王には、戦争をともに戦った兄弟、息子、その他の親族、それに一族の有力武将たちが当然いただろう。彼らはみな長い戦争の年月を戦い抜き、生き残った勇將ばかりである。ともに戦うべき強敵がひとまずいなくなり王が逝去した場合、力の拮抗した有力者同士が自ら王になるために、武力で衝突しかねない状態になった可能性が高い。あたかも、織田信長が殺された後の清須会議のごとくである。武力衝突となると、九州勢が四分五裂するだけでなく、周囲のいまだ服していない国々に足を掬われるとも限らない状態になる。それを避けるため、諸将が一步身を引き、身内の中で神に仕えていた女性を王とし、全員がそれに従うことで衝突を回避した。

なお、ひみこを女王として共立した結果、「其國（女王国）」を含む多くの国々が争った「倭国乱」が治まった、とする説が、いわば定説のようにになっているが、ここには乱が治まった経緯の記載がなく、ひみこを共立したとする国々の王が権力を放棄してひみこの臣下の地位に下るのを納得したのか、また、ひみこの支配を受けることを関係諸国の関係者が納得したのかなどについては一言も書かれていない。第1章にも書いたが、女王国にはひみこと伊都国王以外に王はいない（和議を結んだと思われる吉備や伊予などについては不明）。武力によらず自ら王位を他国の王に譲ることは極めて異例なことである。やはり、乱の収束とひみこの共立は無関係で、乱が治まり、先代の王が没したためにひみこが女王に推戴されたと読むべきと私は解釈している。

ひみこが王になったのは和国大乱が納まり、それまで大和国（邪馬臺国）を率いてきた王が逝去したからである。桓帝・靈帝の治世の間（146年～189年）和国は大いに乱れた、とされており、紀元190年前後に即位したのではないか。そのころ即位したとしたら、帥升らが北部九州を攻めたと思われる紀元105年ごろから数えて85年前後である。「其の国もまた元々男子を王として七、八十年を経ていた」の七、八十年と近似していて、史料の間の整合性に誤りは見られない。また、近畿までの瀬戸内を東進した期間が55年くらいだとすると、近畿の争乱、「和国乱」の期間は30年くらいとなる。逆に、帥升が九州北部を征服したと考えられる105年を起点として七、八十年後を計算すると、175年から185年の間にひみこが即位したことになる。なお、629年に書かれた『梁書』には、和国乱を「靈帝光和中」（178年～184年）とより限定した記述があり、倭国乱は184年までに終わったようだ。そのことから、ひみこの即位は175年では早すぎ、185年ごろとする傍証になりそうだ。そしてそれだと和国乱の期間が15年から25年くらいとなり、ひみこの即位は184年から190年までの間のいつかとなる。いずれにしても、和国乱の期間は15年から30年くらいと長期にわたっており、厳しい戦乱の時代だったことが窺われる。

王に取り立てられた女性は「ひみこ」と名付けられた。「年已に長大なるも」とあるが、いつ時点で年を取っている、としているのかははっきりしない。即位の時点で、例えばすでに二十代後半から三十代だったのか、あるいは、紀行文が書かれた時点で老境に入っていたのか、判断に苦しむ。ただ、「男弟有りて国を治むを佐く」との記事から、ひみこが女王になったとき、ひみこの弟が若すぎた場合、国政運営に支障が生じたであろうから、弟は二十代以上ではなかったかと思われる。そうであれば、ひみこは即位時点で二十代半ばか、それを過ぎていたのではないかと思われる。「ひみこ」は大和言葉である。漢字を充てると「日巫女」。「鬼道を事とし能く衆を惑わす」とあるので、神、その中でも太陽神の巫女として神事を司り、神のお告げをもって国を治めた。身の回りには「婢千人を以て自ら侍せしめ」とあり、「千人」とは具体的な人数でなく、「非常に多くの」の意味で使われたのだろうが、多くの女性たちが仕えていた。ただ一人の男子が飲食を給し、辞を伝えて出入りしていた。日巫女は独身で、国政の表向きに出ることはなく、弟が日巫女の言葉を伝える形で国政を執り行っていた。日巫女は先代の王の血筋、おそらく娘だろうから弟は王の息子のうちの一人だっただろう。身分としては女王の臣下であるが、女王は神に仕える巫女であり、国政には直接タッチしない。この体制の下で政治、軍事が執行されることにより、弟が国政全般に絶大な権力を持つようになり、多くの有力者を日巫女に従わせる形で支配下に置くことになった。その弟を日巫女は神の言葉でサポートした。日巫女は王とはいえ、自分の意のままに動かせる兵を持たず、神に仕えるだけの女王であったからこそ、私利に走らず、神の意向を受けて国のため、民のために身

命を賭したのだろう、それにより、多くの兵を率いる有力者たちの信頼を弟とともに勝ち取ることができた。

先ほど「ひなもり」のところで「ひな」と「もり」が弥生時代から使われていた大和言葉だと書いたが、「ひみこ」の「ひ」(=日)、「みこ」(=巫女)も同じく弥生時代から使われていたことがわかる。これで、「やまと」などの地名を除き、「わ」「ひな」「もり」「ひ」「みこ」の五つの大和言葉が弥生時代以前からのものだと確認できた。

権力を持たない王が支配する国、そんな王国がこれまであったらどうか。

イスラム教の創始者ムハンマドのように、宗教指導者が国を統治することはあったが、強大な権力を持ち、他国を侵略し、占領した国の民には自分の教えである「イスラム教」を強制した。

民主主義が広まった現代では「君臨すれども統治せず」の考え方のもとに、主権在民の王国は多くあるけれど、民主主義が誕生するまでは「国王=権力者、支配者」であった。

世界的にも、歴史的にも例のない王国が、ここに誕生したのだ。

紀元前 69 年から 30 年までの女王だったクレオパトラなど、男王（ファラオ）との共同統治という形で君臨した古代エジプトのプトレマイオス朝の女王たち、およびハトシェプストやセベクネフェルなどのように単独で君臨した女王は例外であるが、東アジアでは、中国を中心とする多くの国々のうち、女性が王として半世紀余り君臨し、かつ、栄えている国は、周囲を見渡しても、過去にさかのぼっても、まったく無かった。この後の日本でも、女帝は、推古、斉明、持統などが出てくるが、男子天皇が成人するまでのつなぎであった。日巫女のいた時代は、大陸は「三国志」の戦乱が続いており、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて大和国も国土の統一のための戦争を続けていた。そうした戦国の常識からして、大和国は、特殊というよりもなにか異様、異常な、ありえない国だった。三国志の撰者の陳寿も好奇心を持ってこの点に注目し、ことさら「女王国」と強調して書いている。陳寿が三国志を書く時の資料が「女王国」としていたからそのとおりに書き写したのかもしれないが、「女王国」には注目したに違いない。『魏志倭人伝』は「邪馬臺国」を女王国の首都とし、ひみこが治める国全体を「女王国」と使い分けているけれども、作者のこうした視点も、意識して見てみると面白い。

この後、女王国から離れた島国の侏儒国、裸国、黒齒国の記載があるが、古い言い伝えか伝聞であろう。どれも国名が大和言葉でなく、根拠のある話とは思えないので省略する。(省略した原文は「女王國東渡海千餘里復有國皆倭種。又有侏儒國在其南人長三四尺去女王四千餘里。又有裸國黒齒國復在其東南船行一年可至參。問倭地絶在海中洲島之上或絶或連周旋可五千餘里」)